

GOKURAKUJI DAYORI
極楽寺だより
2026(令和8)年 3月号



発行所：極楽寺（浄土真宗本願寺派）☎ 759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬 3633 ☎ 0837-43-0625



講師
映画監督
森達也 師

特別講演会

昼一時半

三月八日(日)

春の彼岸会法要のご案内

なぜ、映画監督がご講師？
住職の思いは、次のページに！

彼岸会に
合わせて

極楽寺ギャラリー

開催します！

詳細は、本号最終面に

悲しいお知らせです。
河津桜が...

駐車場の河津桜かわづざくらが咲きそうにありません。夏過ぎから早めに葉っぱが散り、「どうも、おかしいなあ」と思っていたのですが、枯かれてしまったのでしょうか。何が原因かはわかりませんが、ガックリ。ということで、恒例こうれいとなりつつあったライトアップもできなくなっていました。本当に残念です。元気を取り戻してくれないかな…。

なぜ、映画監督がご講師？

なぜ、映画監督がご講師なのでしょう。

森達也さんは、元々テレビディレクター。後に、ドキュメンタリー映画の監督として、数々の話題作を送り出し、作家としても活躍されています。二〇二四年には、初の劇映画『福田村事件』が、日本アカデミー賞作品賞にノミネートされました。

森達也作品の魅力を一言で語るなら、私はカメラの置く位置（視点）のユニークさにあると思います。カメラは置く位置によって、まったく違う景色を映し出します。それと同じく私たちも、立ち位置によって、世界の見え方が変わります。ちようと、桃太郎からと、鬼からでは見える景色が違うように。トランプ支持者とそうではない人、イスラエル側とガザ側では、見える世界がまったく違うように。

森さんの視点はユニークです。私たちのこれまでの枠組みが揺さぶられ、気づきが与えられます。私たちが見ている世界がすべてではないことを。世界はもつと豊か

だし、人はもつと優しいことを。そして人は、優しいままで残酷になれることを。

人間を、私たちのものの見方を、森さんの視点を通して、問い直してみたい。その営みは、人間の弱さや愚かさを、悲しさや切なさを深く見つめた親鸞聖人のまなざしに触れると共に、そんな私たちをどこまでも救わんとはたらいてくださる阿弥陀さまの願いに触れる一助になるのでは。森さんをご講師に迎えるのには、そんな住職の思いがあるのです。■

【森達也】映画監督、作家として活躍。オウム真理教の内部を映し出した『A』や、ゴーストライター問題を題材にした『F A K E』など、ドキュメンタリー作品を数多く手がけ、国内外で高く評価される。2023年、映画

『福田村事件』（百年前に千葉県福田村で実際に起きた行商団九人の虐殺事件を題材とした劇映画）公開。



御正忌報恩講に、たくさんのお参り、有難うございました!!



お花入れ・お盛物の
お手伝いの皆さん

今年も、^{ごしょうきほうおんこう}御正忌報恩講を勤めることができました。お餅つき、お花入れ、^{もりもの}お盛物をお手伝いいただいた皆さん。ワガママな住職による、毎年のメニュー^{へんこう}変更^{へんこう}に振り回された台所の皆さん。有難うございました。そして、例年以上に多くの方々にお参りをいただきました。本当に感謝、感激しております。

特に、今回はたくさんの方がお齋^{とき}についてくださいました。一昨年^{さび}の寂しい景色^{けしき}から^{いってん}一転^{まんせき}。満席に近い様子に、これまた感謝、感激です。

台所の皆さんには申し訳ありませんが、来年も違うメニュー^{ちょうせん}に挑戦する予定です。さてどうなりますやら。どうぞ、お楽しみに！



台所のお手伝いの皆さん

おしエノカケラ



シリーズ〜がんと共に〜

第五回

「死んだら終わり?」



現状報告

今のところ、元気に過ごしています。今回の薬は副作用が酷く、5キロくらい痩せたのですが、

年末^{あたま}辺りから調子が良くなり、体重も戻り^{もど}、すっかり元気になりました。心配していた、二回目の投薬^{とうやくご}後の副作用もなく、ホッとしています。ただ、薬が効^きいているかという点、こちらあまり変わらずと言ったところ。とりあえず、様子を見ていくしかないようです。

人間、死んだら終わり?

さて、近頃は「人間、死んだら終わり」という人が増えました。↘

同時に、「人間が死んだら、終わり」にする人も増えました。

「どういうことかと言うと、「自分が死んだら、葬儀^{そうぎ}はしなくていい」「墓もいらぬ」「もう忘れてくれていい」と、自分の人生を終わりにする人が増えたということです。もちろん、遺^{のこ}された人の気持ちは考えず。

また、葬儀を終えると、すぐさま亡き人の人生を終わらせる人もいます。そそくさと、お仏壇やお墓^{しま}を終い、家を処分^{しよぶん}する。あたかも、その人が生きていた痕跡^{こんせき}を消すかのように。まさに、「人間、死んだら終わり」です。

とは言えこの気持ち、わからなくはないのです。それぞれに事情^{じじょう}がありますし、懸念事項^{けんねんじこう}を早く解決^{かいけつ}しておきたいのも、理解できます。私もせっかちだし、やるべきことはすぐに終わらせたタイプだし。但し、スケジュールの消化^{しょうか}だけが優先^{ゆうせん}されると、↘

大切なことがこぼれ落ちていきます。

事実、そんな光景を第三者の立場か

ら見ていると、「人生を、こんなに軽

く扱って良いものなのか」と愕然とす

るのです。確かに、いずれは処分しな

くてはならないことかもしれません。けれども、立ち止まり、振

り返り、出会い直す営みは、人生を豊かにするための重要な時間

だと思うのです。何より、亡き人との思い出は、私の人生を形作

る大切な一部。それを軽々しく処分することは、自分の人生も軽々

しく扱うことになるのではないですか。

加えて、「年を取ったら、終わり」「病気になるったら終わり」と

自分の人生を、いや他人の人生までも決めつける人もいます。そ

んな言葉を聞くと、病人の私などは「俺は、生きていいのかな」と、

後ろめたさを感じてしまいます。

このような有り様を、「自損損他」と言うのでしょうか。これは、

中国の高僧・善導大師のお言葉（『般舟讚』）で、自分だけではなく、

他者をも損なう生き方を示されたものですが、まさに「死んだ」



ら終わり」「アイツは終わり」と自他を切り捨てる、今の時代を
表しているように思うのです。

目先のことだけで、決めつけてはいないか

しかし切り捨てること、投げ出すことは、実は安易で簡単な選

択なのです。なぜなら、苦難の人生だからと嘆き否定するよりも、

苦難の人生にも関わらず、そこに豊かさを見出し肯定する営みの

方が、はるかに困難で大変な作業なのですから。故に、「こうな

っても終わりではない」と、もがきながらも歩む人に出会えると、

これまでの私の枠組みが揺さぶられ、「人生とは何と奥深いもの

なのか」という驚きや感動が生まれてきます。

同時に、「終わりだ」と安易に否定する人の言葉が、軽薄なも

のに聞こえてくるのです。「人生を簡単に決めつけるなよ」とも

思います。

私は人生の奥深さを、驚きや感動を、親鸞聖人の歩みから、そ

して同じくお念仏の道を歩まれた先輩方の後ろ姿からいただいた

てきました。そんな先達せんたつの一人、金子大栄かねこたいえいという先生のお話を紹介させてください。

金子先生が若い頃、海岸を散歩さんぽしていた時のこと。そこに、波が押し寄せました。岩場いわばなのでしょう。波の滴しずくが、ぱつと飛び散りました。

それを見ながら、若き金子先生は「無限むげんの大海たいかいに比べれば、波の一滴いっついきは何と儂はかないものか。それと同じく私の一生も、波の一滴いっついきのよう儂はかなく小さなものでしかないのでは」と、悶々もんもんとしながら考えました。

ところがその後、様々な学びを経てフツと方向転換ほうこうへんかんしたのだと。どう転換したのかというと、波の一滴だけを切り取れば、儂はかなく小さなものでしかない。けれども、大海のはたらきがあつてこそ、波の一滴が生まれている。ならばこの波の一滴に、大きな海のはたらきが込められているのではないか。

同様にこの私の一生も、今だけを切り取れば儂はかなく小さなものかもしれない。しかし無量むりょうのいのちの歴史れきしと、無限むげんの広がりをもつた世界があるからこそ、私の一生が今ここにある。つまりこゝ

の私の人生には、大いなる歴史とはたらきが込められている。そんな無限なる世界と出会うことで、自然と人生の重さおもも感じられることになるのではないか。そう転換したのだと言われています。『人間について』金子大栄

この私の一生は、死んだらそれで終わっていくような、ちっぽけなものではない。細やかではあつても、この私には、大いなる世界のはたらきが込められている。いのちの連なりの中で、生かされている。そして私たちは、大いなる世界に帰かえっていく。何と、スケールの大きなものの方みかたでしょうか。

考えてみれば、目先めさきのことだけを切り取って、それですべてを量はかろうとするから「死んだら終わり」と決めつけてしまうのではないですか。それは、安易あんいで傲慢ごうまんなふるまいです。世界はもつと大きくて、深い。私のちっぽけな考えで、決めつけられるようなものではありません。

そんな大いなる世界に、頭こうべを垂たれる。大いなる世界からの呼よべ



び声に、うなずいていく。その営みを金子大栄先生は、「南無阿彌陀仏」とお念仏を称えることだと言われています。

元々、アミタという言葉は、量ることができない無限なるものという意味です。また、かつてのインドの人たちは、「大いなるもの」を言い現わすときには、アミタということばを使っていたそうです。その大いなる世界にうなずき、手を合わせる事が、自分のいのちの深さと広さと出会うことになるのだと。私たちは、そんな世界のはたらきを見失い、目先のことに捉われ、決めつけ、切り捨て合いながら生きてはいないでしょうか。

「自利利他」の道か 「自損損他」の道か

がんという病気をいただき、死と向き合わざるを得ない状況にある私にとって、大いなる世界と出会われ、人生の奥深さと重さを味わう人びとの後ろ姿は、歩む力を与えてくださる確かな存在です。

とはいえ、今や「死んだら終わり」と切り捨てる人の言葉が、

数多く飛び交う時代。軽薄な言葉だと頭では理解していても、その言葉を聞く度に揺らぎ、不安になり、歩む力が削られる私もあります。

ならば、私は誰の言葉を聞いているのか。世界をどう受け止め、どんな態度で生きているのか。どこに立ち戻るのか。これは、個人的なふるまいの話ではなく、他者にも影響を与えていく重大な問題だと言えるでしょう。

仏道の目指すべき境地として、「自利利他」があります。自らの悟りが、そのまま他者の救いにつながり、他者の喜びがそのまま自らの喜びとなる生き方です。そんな「自利利他」を希求するのか、それとも「自損損他」を選ぶのか。

まさに、私たちの態度が問われています。揺らぎながらではありませんが、歩む力が与えられる言葉をよりどころとせねば。などと思う、今日この頃です。 ■



住職力作！

しゃが じゅうだい だし 本堂に、釈迦十大弟子が！



棟方志功（むなかたしこう）をご存知でしょうか。

青森出身の世界的な版画家です。

住職は長年、大ファンを自称しているのですが、

それが高じて、棟方の代表作

『釈迦十大弟子』（十人のお弟子と、文殊菩薩・普賢菩薩を描いた十二枚の大作！）を模して、杉板に彫ってしまいました。

稚拙な出来なので、棟方に失礼になるかもしれませんが、そこは素人の趣味レベルということでご容赦（ようしゃ）いただいて。

そして図々（ずず）しくも、本堂に飾るといふ暴挙（ぼうきょ）に出してしまいました。

た。『阿弥陀経（あみだぎょう）』に出て来られる六人のお弟子と文殊菩薩、そして『大無量寿経（だいむりょうじゆきやう）』で重要な役割（やくわ）を担（た）われている普賢菩薩（ふげんぼさつ）を飾っております。

あまり近くで見られると、稚拙（ちせつ）さがバレてしまいますので、少し遠目（とおめ）から見ていただけたら嬉しい（うれ）です。



棟方志功（1903 - 1975）





『鬼滅の刃』のワンシーン

『阿彌陀経』は、法事などでよく勤められるお経です。漫画『鬼滅の刃』にも出てきます。赤い聖典の106ページに、お弟子さんの名前が出てきますので、ぜひ住職の作品と照らし合わせてください。

【迦旃延（かせんねん）】論議第一。教理の論理的な解釈に優れていた。



【舍利弗（しゃりほつ）】智慧第一。『阿彌陀経』では、お釈迦さまの説法相手として登場する。



【目犍連（もつけんれん）】神通第一。舍利弗と並ぶ二大弟子として活躍した。



【大迦葉（だいかしやう）】頭陀第一。お釈迦さま死後、最初の經典編纂の座長を勤めた。



【阿難陀（あなんだ）】多聞第一。長年、お釈迦さまの付き人を勤めた。



【羅睺羅（らごら）】密行第一。お釈迦さまの実子でもある。



【文殊菩薩（もんじゅぼさつ）】「三人寄れば文殊の知恵」で知られる智慧の菩薩。お釈迦さまの脇侍（補佐役）。



【普賢菩薩（ふげんぼさつ）】お釈迦さまの脇侍（補佐役）で、慈悲の菩薩。『大無量寿経』や『華嚴経』では、私たちと阿彌陀様をつなぐ重要なはたらきを勤める。

● 仏説阿彌陀経

赤い聖典106ページ

如是我聞一時仏在舍衛國祇樹給孤獨園
与大比丘衆千二百五十人俱皆是阿羅
漢衆所知盡長老舍利弗摩訶目犍連摩訶
迦葉摩訶迦旃延摩訶俱絺羅離婆多周利
槃陀伽難陀阿難陀羅睺羅憍梵波提賓頭
盧頗羅墮迦留陀夷摩訶劫賓那薄拘羅阿
菟樓駄如是等諸大弟子并諸菩薩摩訶薩
文殊師利法王子阿逸多菩薩乾陀訶提菩
薩常精進菩薩与如是等諸大菩薩及釈提
桓因等無量諸天大衆俱

月々の言葉

Monthly Words



2月の言葉

徳島県の最南端、高知県との境で、「海部川風流マラソン」という大会が開催されてきました（現在は、ボランティアの高齢化、開催費用と財源等の問題に、コロナウイルス感染症の影響が重なり終了）。実はこの大会、ランナーに大人気で、ランニング情報サイトの口コミで5年連続全国1位を獲得するほどでした。徳島市内から車で二時間。不便な場所で、しかも高低差がきついタフなコースなのに、なぜそこまでの人気を誇っていたのでしょうか。その秘密は、地域の人たちのあたたかな接待にありました。この地域は、お遍路さんをもてなす文化が根付いており、幼稚園の子、おばあちゃん、町の人たち全体で応援してくれるのです。

阿波踊りや太鼓の演奏もあり。畑から、おばちゃんが身体いっぱいにしてくれる応援や、道端の子どもたちとのハイタッチ等々。

中でも、ランナーに一番好評だったのが、地元海南高校陸上部の生徒たちが、ゴール前最後のきつい坂道を伴走してくれることでした。ゴール前に続く坂道。一番苦しい時に、「頑張ってください」と声を掛けながら、一緒に走ってくれる人がいる。これが一番力になるのだそうです。

マラソンは一人の競技です。走るの一人。でも、歓迎される、応援される、一緒に走る。これが力になる。まったく違うと、ランナーは口を揃えるのです（NHKBS『ラン×スマ』街の風になれ）。

残念ながら、私は長距離走が大の苦手、マラソンなんてとんでもない！というタイプの人間です。だからランナーの気持ちはわかりませんが、人生を歩むことにおいては、共通するところがあるのではと考えさせられました。



た。

マラソンで走るのも、私たちが人生を歩むのも、所詮は私一人のこと。『大無量寿経』には「独生独死独去独来（人は独り生まれ、独り死に、独り去り、独り来る）」という一節もあります。しかし、一人で歩む人生においても、歓迎され、応援され、共に歩んでくださる方があることは、とても大きな力になります。一人で歩むものとは、まったく違う景色が広がります。

児童文学研究者で、青山学院女子短期大学名誉教授の清水真砂子先生は、ある時新生に「子ども時代の一番幸福な思い出は？」と質問したそうです。ところが最初の年に出てきたのは、何かを買ってもらったこと、どこかに連れていってもらったことばかりでした。

清水先生は、幸せを感じるとは、そういうこととは違うのではないか。近頃の子は、消費やイベント事^{イベント}でしか幸福を感じるできないのだろうか？とガツ



カリし、友人である昔話の語り手・藤田浩子さんに話しました。

すると藤田さんから、「それは訊き方が悪い」と即座に言われたそうです。実は彼女も、同じ質問を子どもたちにしたことがあるそうで、今の消費社会では「放っておけば、そういう答えしか出てこないのは当たり前だ」とも言われました。では、どうすれば良いのか。そこで藤田さんは、消費やイベント事を除いた「子ども時代の一番幸福な思い出は？」と訊くことを薦めてくれたのです。実際にやってみると、出てくること、出てくること。地味で些細なことでも、一つ一つの物語が光っていたと言われます。

ある学生は、こんな話をしてくれました。幼稚園の頃、おばあさんが入院していて、おじいさんとよく病院にお見舞いに行っていた。その電車の中で、おじいさんが隣に座っている幼い彼女の膝を、優しくトントントン叩き続けてくれた。「先生に言われて、そのことを思い出しました。考えてみると、あのトントントンが、今までずっと私を支えてくれたのかもしれない」とその学生は言ったそうです。



また、ある学生はこう言いました。まだ靴下を自分で履けないくらい小さかった頃、母親はいつも靴下を履かせてくれた後に、足をクルッと撫でてくれた。あの撫でてもらった感触が忘れられない。

他にも、自転車を練習していた時に、お父さんが後ろをまた押してくれていると思っていた。気がつくとも手が離れていたけれど、お父さんが見守っていてくれて、自分と繋がっているように感じたとか。地味で些細なことだけど、どれもがあたたかく、温もりが込められているお話です。読んでいるこちらも、胸があたたかくなってくるようです。

清水先生は言われます。日常にあるそういう幸せを受け取る力を、子どもはしっかりと持っている。にもかかわらず、手許に手繰り寄せる力が弱まっている。消費やイベント事に目を向けさせられ、見えなくなっている。そして、自分たちの日常なんてつまらないものと思ひ込まされ、語るに値しないものだと思ひ込まされていく。そういう力が今、私たちにいろんな形でのしかかっているのではないかと。『幸福に驚く力』清水真砂子

きっと誰もが、自分の人生を掘り下げれば、私に向けられた温もりの記憶が必ずあるはずです。そして実は、そんな温もりこそが、今の私を支えてくれているのではないですか。

向けられた温もりは、「私がここにいていいんだ。私は求められ、願われている」と思える根拠になります。「私は歓迎され、応援されている。共に歩んでくださる方がいる」と実感できる拠り所でもあります。その時に、気がつかなくても。その人が、すでにこの場に、いやこの世にいらなくても。手触りのある確かな温もりは、私を支え続けてくださるのです。

しかし現代社会においては、清水先生が危惧しておられる通り、消費やイベントに目を向けさせられ、温もりが見えなくなっているのではないのでしょうか。そして、自分たちの日常なんてつまらないもの、語るに値しないものだと思ひ込まされてはいないのでしょうか

このような時代だからこそ私は、私たちの「いわれ（由来、由緒、因）」を味わう営みを、取り戻すべきではない



かと思っっているのです。

浄土真宗では、仏法を聴聞ちようもんするとは、「南無阿弥陀仏のいわれを聞く」ことだと教えられます。それは、迷いまよを迷いと気づくこともなく迷いを深める私のために、阿弥陀さまが本願ほんがんをたて、お念仏ねんぶつを用意し、はたらきかけてくださっている。その阿弥陀さまのはたらきを聞くということです。

同時にそれは、この私のために、どれほどの深い願いやはたらきが向けられているのかを味わう「私のいわれ」を聞くことでもあるのです。私がどれだけ大切に願ねがわれているのか、私に届とどけられている温もりがどれほど深いものかを掘り下げていく。手許てもとに手繰り寄せていく。それが「南無阿弥陀仏のいわれを聞く」ということでもあるのです。

そして、この私への温もりを深く味わう時、それを受け取るセンサーじゆしんのうりよくの受信能力は高まり、様々な方からの温もりにも気づかされていきます。だからこそ、浄土真宗は「恩おん」を大切にするのでしよう。 →

近頃は「恩」と言うと、「恩着せがましい」「鬱陶うつとうしい」といった、負おい目を感じさせるようなイメージが流布るふしていますが、それらとは似て非なるもの。なぜなら人生とは、そんな薄うすつぺらな貸かし借りだけで量はかるものではないのですから。

「恩」とは字の如く、「因いん（いわれ）」に気づく「心」です。この私に向けられた温もり気づく心であり、私の人生の深さと広さ、そして重さを味わう心でもあります。

そして「恩」を知る時、また新たな出で会あい直なおしが開かれていくのでしよう。その方はすでにこの場に、いやこの世にいらなくても、共に生きていく歩みが始まっていく。そこには一人で歩むものは、まったく違ちがう景色けしきが広がっています。 ■



若院通信

じゃくいんつうしん



私がお寺に戻ってから一年が経ちました。駆け足に過ぎていったような、物凄く長かったようなそんな気がします。

短く感じているのは、報恩講やお取越しなどの目の前のことでいっぱいになってしまつて、気付いたらここまで来たような。

長く感じるのはまだ法話など上手くできないことが多く、やるべきこと、できるようにならないといけないことが多く、先のことを考えてしまうからだと思います。でも、まだ上手くできないことと出遇うたびに、自分のどこが未熟なのかを知らされたのは、大きな意味があつたように感じています。

振り返れば未熟、前を向けば険しい。しかし、そうやって少しずつ積み重ねていく他ありません。今はまだまだ未熟な自分ではあります。住職やご門徒さんたちの姿に学びながら、出来ることから少しずつ積み重ねていければと思います。どうぞこれからも、お見守りください。 ■

物でお布施

家庭で眠っている物を、周りの人のために、活かしませんか。下記の物があれば、お寺までお持ちください。

書き損じはがき・未使用切手・商品券・未使用テレフォンカード・ビール券など金券・CD・DVD・ゲームソフト・ゲーム機器
未使用のタオル 石鹸 シーツ類



プルトップも、引き続き集めています！

納骨堂新築計画進行中です

極楽寺の納骨堂新築計画が進んでいます。これからの維持管理を考えると、お墓よりも納骨堂の方が負担は確実に少ないと言えます。ご門徒以外の方でも大丈夫です。遠慮なく、お寺までご相談ください。

葬儀の連絡は、真夜中でも結構です！

親しい方が亡くなれば、皆さん動揺されます。「これからどうすれば良いのか」と、不安になる方も多くあります。近頃は葬儀社さんも働き方改革で、夜中に対応する人と実際に葬儀を担当する人とを分けておられるようです。そのため引継ぎが上手くいかず、行き違いやすれ違いのケースも目にします。遺族の方に、しっかりと寄り添うためにも、住職や若院が間に入ります。どんな時間でも結構です。遠慮なく、ご連絡ください。



3月の言葉

曹洞宗の僧侶・酒井大岳さんが、ネパールのチトワン国立公園内の大密林を、通訳のシエルパと歩いた時のこと。所々に直径四メートル程の円形の窪みがあることに気づいたそうです。するとシエルパが、「これは老いたサイが、死ぬ前に作る水だめです」と説明してくれました。

「雨期の終わりの七月頃、年老いたサイが一族を集め、体を横にしてぐるぐると回り、土をこねます。そこに雨がたまり、落ち葉が積もって水の蒸発を防ぎ、水だめになります。ネパールでは、八月から翌年三月頃までの約八ヶ月、乾期で雨が降りません。その間、水がなくて死ぬ動物はたくさんいます。でもサイの一族には、その心配はありません。水のあるところを知っているからです。もちろん、ほかの動物や鳥たちも、

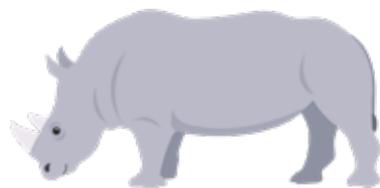
やって来て、サイが作った水だめの水を飲みます」

「サイの一族は怒りませんか？」

「怒りませんよ」そして、こう続けました。

「水だめを作るときに一族を集めるのは、こうしないと冬は越せないことを子孫に伝えるためです。これは人類の歴史よりも長く、何万年も続いているそうです」と。

長い歴史を通して自分のために伝えられたことを受け継ぎ、また新たな歴史へと繋げていく。壮大な歴史の中に、自分の生を見出していく。スケールの大きなお話です。



ところが近頃は、「受け継ぐ」「伝える」という営みが、虚しいものになろうとしています。昔は、先祖から伝えられた山や田畑を継ぎ、家業や地域文化を受け継ぐのは当たり前前のことでした。受け継いでくれる相手がいるからこそ、伝えることへの責任感や充実感も生まれていました。

しかし今や、受け継ぐ人のない田畑は増え、田舎から若

者の姿は消えつつあります。これには、経済的な問題をはじめとした様々な要因があるのでしようが、その一つとして「社会の流動化」が指摘されています。「流動」とは、読んで字の如く「一か所にとどまらず、流れ動くこと」。一か所にとどまり、その地に根を張るよりも、自由に流れ動くことが優先される時代になったのです。

それは、悪いことではありません。流動性が高い国ほど、生まれた階級や環境から抜け出しやすく、自由や平等が実現されていると言われています。それに、人もモノも動かしやすくなるほど、効率よく運用できますし、合理的だとも言われます。

但し仏教では、どんなに良いことでも偏ると、迷いが深まるのだと指摘されます。確かに、流動化に偏った歪みが、今や様々な形で表れているようです。流れを悪くし、動きにくくするものは、すべて邪魔もの扱い。地縁や血縁はその代表格でしょう。人間関係はしがらみに過ぎないし、山も田んぼもお墓も負担でしかない。いや、自由に生きることが妨げらる、呪縛のように受け止める人もいます。それはお寺とい

う流動性の悪い場にいると、よく見かける光景です。

こんな状況では、自分に伝えられたことを次の世代へ伝えるという営みが、虚しいものに感じられても仕方ありません。伝えようとしても、受け継いでくれる者がいない。古臭くて、無駄なものだと決めつけられ、負担を押し付けるなど眉をひそめられる。そんなふるまいは、葬儀や法事といった伝統的な場において、何度も見かけるところです。

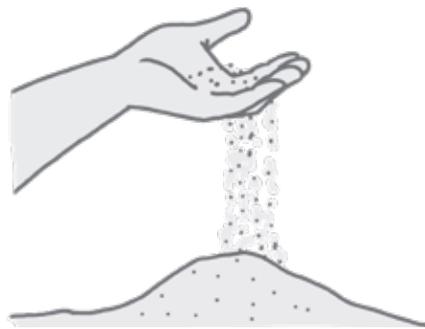


ただ、流動性が低かった時代には、「根無し草」という表現が使われていました。一つの場所に定住せず、転々としている不安定な生き方。それらを、水面に浮かび漂う水草に譬えたもので、あまり良い意味ではありませんでした。つまり流動性が高く、自由であることは、同時に不安定だということなのです。人間関係が濃密な中にと、流動性は悪くても安定しています。水分を含んだ粘土のように。そして、そ

の人間関係は濃密な分、助け合うことへの責任感もありました（もちろん、鬱陶し^{うつとう}さや圧力^{あつりよくともな}も伴^{かたよ}って。偏^{かたよ}らないって、難しいことなのです）。

ところが、乾^{かわ}いた砂粒^{かなつぶ}のように流動性^{りゅうどうせい}が高くなると、サラサラとこぼれ落ちる危険性^{きけんせい}を孕^{はら}みます。つまり、人間関係から自由になることは、孤立^{こりつ}していくことでもあるのです。

調子が良い時は、それでもいいのかもしれませんが。強くあれる時なら、不安定でも何とかなる。但し仏教では、すべてのものは常に変化し、変わらぬものなどないとも指摘します。つまり人間は、いつまでも元気で強くはいられないのです。そんな時、よるべきところを持たない孤立した状況は、かなり過酷^{かこく}だといえるでしょう。

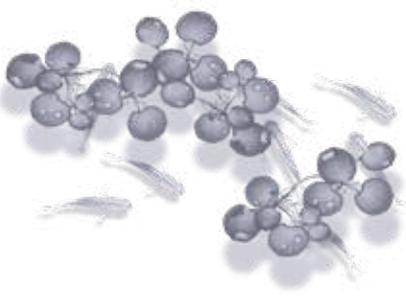


にも関わらず、人間関係を呪縛^{じゆばく}のように考えることで、助けを求めることを、人に迷惑^{めいわく}をかけることと同義^{どうぎ}にしてしまいました。そうして、「人に迷惑^{めいわく}をかけてはいけない」と

いう新たな呪縛^{じゆばく}が生まれ、孤立は加速^{かそく}しています。

何より、地縁^{ぢえん}や血縁^{けつえん}といったものを断ち切ることは、人間関係からの孤立^{こりつ}だけでなく、歴史からの孤立^{こりつ}をも生み出します。壮大^{そうだい}ないのちの歴史の中に、自分を見出すことができなくなる。小さな砂粒^{すなつぶ}のようにしか自分を感じられなくなる。「自分さえよければ」「どうせ死んだら終わり」と、自分の人生をスケールの小さなものにしてしまう。

ちなみに、「根無し草」のことを、フランス語で「デラシネ」と言います。「根から引き抜かれた」という意味から転^{てん}じて、「故郷^{こきょう}や祖国^{そこく}から切り離された人」を指^さして使われます。それは同時に、精神^{せいしん}的なよりどころを失った人、自分が何者かを見失った人のことをも指^さしています。そんな「根無し草」の生き方や孤立した状況を、私たちは子孫^{しよん}に遺^{のこ}そうとしてはいないでしょうか。



真宗大谷派のお寺の坊守^{ぼうもり}さんで、鈴木章子^{すずきあやこ}さんという方が、

おられました。お念仏の教えをよりどころに、がんどの闘病生活を、確かな足取りで歩まれた方でした。

ある時彼女は、入院先の病院の看護師長さんから、こんな質問を受けました。

「あなたは、高校生の息子さんが卒業されるまでの三年間、生きていたいということでしたね。子どもさんたちに、何をしてあげたいと思つて三年とおつしやつたのですか」。

何気ない看護師長さんの問いは、鈴木さんのすべてを傾けるほどの、大きなものとなりました。考えてみれば、私がいなくても学資は仕送りができる、

ご飯も食べられるし、子どもたちはちゃんと生きていける。そう気づいたとき、自分というものが明白でないまま生きてきたことに気づかされたからです。そして、子どもたちにとって私の存在とは何か、私は何を遺すべきかを問い直された上で、看護師長さんにこのような手紙を書かれました。



「自分のすべきことが、分かりました。がんでも逃げ

ない姿を、子どもたちに見せます。そうすれば、僕たちも逃げてはいけなと生きていつてくれるに違いない。がんでも笑っていたお母さんというイメージを、三年間残していこうと思います」と。

ところが、ある時ふつと考えたそうです。果たして最後まで笑っていられるのか。痛み支配されたとき、どんな私でいられるのか。何より、無理して強い姿を見せることは、「強くあらねば」という呪縛を遺すことにもなりかねない。

鈴木さんは、新たな問いと出会われたのです。ここに、大きな転換がありました。そして本当に遺すべきは、阿弥陀さまのはたらきだと落ち着かれたのです。

「今、私が子どもたちに願うことは、お母さんががんになつて何に気づかされたか、そしてお母さんはどこへ帰っていくのかということ、しっかり見てほしいと思います。私の帰っていくところを、私の死を通してうけとつてくれれば、意義ある死となるのではないでしょうか」(『癌告知のあとで』鈴木章子)。

先輩方が連綿と受け継いでこられた阿弥陀さまのはた

先

らきが、今まさにここに在り、お母さんは大切な気づきを
いただいていること。そのはたらきは、どんなに弱い私で
も受け止めてくださること。そしてお母さんには帰ってい
く世界、阿弥陀さまのお浄土じょうどがあり、そんな壮大なはたら
きに、あなたたちも共に包まれていること。そんな安心感あんしんかんを、
子どもたちに伝えようとされたのです。

とはいえ、こんな話は伝わりにくい時代になりました。
しかし、心が乾かわいている時代だからこそ、この営みはサイ
が水だめを用意よういする行為に、似ているように思うのです。
用意した水だめは、子孫のサイが飲むとは限りかぎません。別
の動物が飲むかもしれない。しかし、あとから来る者のた
めに、それを用意しておく。

これはもう、受け継ぐ人がいるかどうかの問題ではなく、
生きる態度たいどの問題なのでしょう。私は、何を受け継いだのか。
それを、どう受け止めたのか。そのうえで、どう生きるべ
きかという。

あなたは何を受け継ぎ、どう受け止めていますか。そ

して、どのように生きようとされ
ていますか。今こそ共に、見つめ
直してみませんか。 ■



極楽寺だよりを 送riませんか

都会に出ておられる
子どもさん、お孫
さんたち、有縁の
方々へ。
お寺にお申し出く
ださい。直接郵送
いたします。
ご遠慮なく!



極楽寺
ホームページ

極楽寺.comで
検索を

又はQRコードから



3月8日(水) 彼岸会に合わせて

入場は
無料です

極楽寺ギャラリー
開催します！

今年も久原・香月家のご協力のもと『極楽寺ギャラリー』を開催致します。今年、齋藤静輝さんの作品展です。アートに親しむことで、感性を磨くご縁にさせていただければ…などとカッコつけたましたが、住職もアートに造詣が深いわけではありません。気楽な気持ちで、ご覧いただければと思います。

今年 『齋藤静輝作品展』です

【齋藤静輝 (さいとう・しずてる)】1935年 山梨県甲府市生

東京芸術大学油画科卒業後、国画会を中心に活躍する。

人間愛をテーマに、ヒューマニティーに溢れた作品で知られている。余計なものを削り取った様式は現代彫刻のようだが、そこに冷たさはなく、やさしい人間の息吹と、体温までが感じられる。



□ 今年の御正忌報恩講は、いつも以上にお参りが多く、本当に喜んでます。お齋に着かれる方も増え、お齋改革に取り組んで良かった！と大喜び。感謝しております。□ さて、今回の薬は最初に使った時の副作用が酷く、かなり苦しんだので、二回目以降も多分…と覚悟していたのですが、その後は副作用が出ず、元気に過ごせています。本当に良かった！

□ しかし、駐車場の河津桜はショックでした。恒例になりつつあったライトアップもできず、ガックリ。このまま枯れてしまうのでしょうか。彼岸会法要では河津桜の復活を願い、以前制作した「ライトアップの動画」をお見せしたいと考えています。□ もう一つ、ショックなことが。昨年十一月、十二月の水道料金が、な、何と8万円を超えていたのです。現在はメーターが回っていないので、漏水ではない様子。色々調べたのですが、考えられる要因は一つだけ。鐘撞き堂横のトイレの部品が上手くハマらずに、水が流れ続けていたのではということ。何せ、かなり年数が経ったトイレですからね。仕方なく、それから毎日トイレとメーターをチェックするようにしています。□ しかし、こうして喜怒哀楽を味わう日々がいただけていることは、有り難いと痛感しています。副作用が酷かったら、それどころではありませんから。とは言え、河津桜も水道料金8万円も、かなり引きずってはいるのですが。あと、カーブの選手の逮捕も大ショック。期待していた選手だけに、引きずっています。(住職)

次回法座の予定

春の永代経法要 4月15日(水) 16日(木)

講師 森 哲人 師(福岡市 本願寺派布教使)